

留学生と児童との共修についての実践研究 —茶道・伝統的な遊びを通して—

Study, Practice and learn together with a foreign student and the primary schoolchild
- Through tea ceremony and traditional child's play -

山田 佳古
国際学生部門

本稿では、「自文化理解」「異文化理解」を実現する「異文化交流の場」として、留学生と日本人児童との「茶道」「伝統的な日本の遊び」の共修を行い、より深い交流の前準備として、お互いの不安感を取り除くこと、さらに日本文化に対する苦手意識を払拭させることを試み、年代の違いをこえた共修の在り方について実践研究を行った。

キーワード：日本語教育, 実践研究, 異文化理解, 伝統文化, 茶道

1. はじめに

留学生と日本人学生との交流や共修、留学生と児童や生徒との交流に関する研究は多く見られるが、留学生と児童との共修については、筆者が調べた限りはないと思われる。留学生と児童との共修を試みたが、留学生の共修相手が日本人学生ではなく、日本人児童であるのには、いくつか理由がある。

本稿では、留学生と日本人とが共に学ぶものとして、茶道などの伝統文化の体験学習を選んだ。留学生に比べて学習内容に対する知識の多い日本人学生では、日本人が留学生に教えるという関係となり、共修がのぞめないと考えたからであることと、学習内容に対する知識が同程度である方が大きなピア効果が期待できるためである。

また、これまで筆者が見てきた限りでは、同年齢以上の日本人と留学生との交流では、留学生が受け身になりがちであったのだが、年下の児童との共修ならば、慢性的な留学生の受け身体質を変えられる良い機会となると考えたからである。

日本で生活していれば、当然、日本文化に触れられるのであるが、漫然と日本で生活していれば身に付くというものではなく、意識して学ぼうとしなければ身に付かないものである。一度体験させ、興味を持たせれば、身近にある伝統文化に自然と目がとまり、その小さな積み重ねが、十年後、二十年後には大きなものとなるはずである。筆者は常

に留学生の日本での生活自体が日本語や日本文化の学習となることを心がけて日本語クラス等を担当している。同じことが日本人にも当てはまると考え、最も教育効果が大きいと思われる年齢の低い児童との日本の伝統文化を共修することを考えた。

知識ではなく、実際に茶道等の伝統文化を体験する体験学習を、留学生と日本人児童とで共修するという試みは、おそらく、本稿が初めてであると思われる。

2. 目的と方法

2.1 体験学習の意義

近年、現地へ赴かずともインターネット等を介し、居ながらにして即座に日本や日本文化を知るなどの「間接体験」の機会が、また、インターネットや AI により日本語を学ぶなどの「疑似体験」の機会が、容易に得られるようになってきた。文部科学省の『体験活動事例集—体験のススメ— [平成 17,18 年度 豊かな体験活動推進事業より]』（2008 年 1 月）に、「今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う『直接体験』である」とあるように、情報化社会だからこそ、体験を交えた学びを提供する意義があるのだ。文部科学省により、英語の学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することについて提言されたことから、「できるか、できないか」が重要であることがわかるだろう。

現在、和歌山大学には、131名（2017年4月1日現在）の留学生在籍しているが、近年は、留学生の多様化が進み、短期の交換留学生なども増え、これまで以上に日本語や日本文化に興味を持つ学生が増えてきた。留学生在が日本に留学して学ぶことの意義は、日本人と日本語で交わり、日本文化を肌で感じる体験にあるため、本学では、2015年度より、留学生に向けて「日本文化入門」を開講し、着物の着付け、茶道、華道、書道、篆刻、和菓子作りなど、知識を得るのではなく、知識を活かせるように、日本の文化を実際に体験しながら、広く学ぶ機会を提供している。語学と同じように日本文化の知識も体験しなければ身に付かない。逆に、体験することで容易に理解できることも多い。例えば、着衣水泳が困難であることと同じように、洋服で茶道を学ぶことは困難である。洋服ならば大股で歩いたり、腕を高く上げたりできるが、着物ではそれらが難しいため、着物を着て臨むだけで自然に茶道の所作となるようになるのだ。このように、体験することで気づくことが多くあり、また、自ら気づいたことは忘れることはない。体験することの学習効果は非常に大きいのだ。また、そのような知識や体験は、留学生だけでなく、海外とつながる日本人にも必要な知識ではないだろうか。

2.2 共修の意義

近年、グローバル人材を育成が強くたわれるようになったが、グローバル人材の育成には、どのような目標を設定すれば良いだろうか。「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」（2011年6月）グローバル人材育成推進会議に、「グローバル人材」の概念が、以下の三つに整理されている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

以上の要素Ⅰの語学力・コミュニケーション能力を実現させるためには、「この国の、この人ともっと話したい」と思わせ、語学に対する学習意欲を持たせることが何よりも重要であろう。

要素Ⅲの異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーを実現させるためには、「自文化理解」と「異文化理解」が必要であろう。また、自分と異なる

他者を理解し、受け入れるためには、自己を理解する必要がある。つまり、「自文化理解」「異文化理解」と、「異文化交流の場」が必要不可欠なのである。

要素Ⅱの主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感を持たせるには、ゲストとホストの関係で一方通行なものというだけではなく、協働で何かを作り上げたり、一緒に同じ目的に向かって活動したりするという国際共修を行うことが必要であろう。

留学生と日本人との共修により、自文化理解と異文化理解の両方をも実現させ、要素Ⅱの主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感を持たせることができる。

2.3 留学生と日本人との共修

「知らない」ことは「怖い」ものである。同じ国の者同士でも、初対面の者といきなり交流できるものではない。異文化を持つ人同士ならば尚更である。まずは、交流の前準備として、お互いの不安感を取り除くことが必要不可欠である。交流のみを目的とすれば、会話が続かない、質問がない、何を話して良いかわからないという状況が発生する可能性があるが、共修ならばそのようなことはない。もちろん、疑問が生まれた際にはすぐに相手にたずねることもできる。どのような人かを知れば、自然と不安感も取り除かれると思われる。

それと同じことが、伝統文化に対する苦手意識にも当てはめることができよう。留学生もそうではあるが、多くの日本人が茶道に対する苦手意識を持っているように思う。楽しく共修することにより、それらに対する苦手意識も自然に消え、自然にコミュニケーションを取れるようになり、より深い交流へと導くことができるであろう。

本稿では、「自文化理解」「異文化理解」を実現する「異文化交流の場」として、留学生と日本人児童との「茶道」「伝統的な日本の遊び」の共修を行い、より深い交流の前準備として、お互いの不安感を取り除くことと、日本文化に対する苦手意識を払拭させ、より深い交流へ導くことを試みた。

2.4 共修内容

本稿では、共修内容に、この「日本文化入門」の学習項目である「茶道」と「伝統的な日本の遊び」と選択した。いざ交流しようと思っても、何を話して良いか迷うものであるが、茶道ならば、「お菓子、おいしいね」「お

茶、苦い?」というような他愛ない話ができ、さらに、菓子、日本料理、陶磁器、華道、書道、漆器、宗教、畳など、様々な要素が融合した茶道では話題にこと欠くことはない上、浅く広く日本文化を知る良い機会を生み出してくれるからである。また、交流相手への不安感を取り除く為には、楽しめる内容であることが望ましいことから、日本の伝統的な遊びを選んだ。

茶道は、留学生は全員和服で臨む（事前に着物の着付けや、和菓子作りの学習内容を終えている）。留学生は、事前に簡単に茶道のことを学習してはいるが、まだ身につけてはいない状態である。まず、全体でお茶の飲み方等の簡単な説明をした後、留学生と児童とを6グループに分け、各グループでお茶を飲みながら交流してもらった。

日本の伝統的な遊びでは、留学生と児童とを6グループに分け、百人一首と花札に関する日本語や日本文化の説明をした後、実際に体験してもらった。また、七夕の前日であったため、七夕の説明の後、竹に短冊をつるしてもらった。各々遊びから生まれた言葉を紹介した後、残りの時間で、だるまおとし、けん玉、こま回し、ビー玉、おはじき、紙風船、竹とんぼ、吹き戻し、福笑い、スーパーボールすくいなど、自由に体験してもらった。

2.5 共修者

2017年度前期の「日本文化入門」を受講している留学生と和歌山市立藤戸台小学校6年生の児童との共修・交流を試みた。

2017年度前期の「日本文化入門」を受講した留学生の国籍は、中国11名、ベトナム3名、マレーシア3名、韓国2名、イギリス1名、インドネシア1名、オーストラリア1名、フランス1名、ブルガリア1名の計24名であり、男性9名、女性15名である。和歌山市立藤戸台小学校6年生の児童33名である。

「茶道」では、留学生22名（中国と韓国の各1名が欠席）、児童32名（1名欠席）が参加し、「伝統的な日本の遊び」では、留学生21名（中国、ベトナム、マレーシアの各1名が欠席）と、児童33名が参加した。

2.6 調査方法

共修・交流の前後の、計4回、無記名での紙面調査を行った。「茶道」の共修前紙面調査は、留学生20名、児童33名、共修後紙面調査は、留学生22名、小学

生32名であり、「日本の伝統的な遊び」の共修前紙面調査は、留学生10名、児童33名、共修後紙面調査は、留学生7名、小学生33名であった。特に「日本の伝統的な遊び」の留学生の紙面調査用紙の回収枚数が極端に少ないのは、紙面調査当日に欠席していた、時間内に紙面調査用紙に記入できなかったという理由に加え、「茶道」で行った紙面調査と似た内容であったことから「すでにアンケートに答えた」と思い込んだこと、また、無記名であることから白紙で提出する者が多かった為である。

2.7 期待できる効果

異文化を持つ人との交流経験がない、あるいは少ない場合、交流に対する不安感は大いなものと思われる。その理由の多くは言語が通じるかにあると思われるが、ただの無意味なお喋りでは留学生の日本語力を上げることは難しいことから見ると、実際の交流では言語力はさほど必要ではないだろう。案ずるより産むが易いという状況であると思われ、交流で楽しさを感じられれば、そのような不安感は払拭されると予想される。

また、共修・交流により、異文化を持つ人に対する苦手意識が払拭され、そのイメージが良くなることと、多人数との交流から、人にはそれぞれ個性があることを知り、「外国人は派手だ」「日本人は大人しい」などの先入観を取り除くことができると予想される。

接していない物や人に興味や学習意欲を持ってというのは、無理な話である。茶道の目的の一つに、主客に一体感を生ずるほど充実した茶会となる「一座建立」があるが、皆が楽しめなければ、それは実現できない。実際のお茶会は楽しむものであり、決して堅苦しいものではない。ゆえに、こちらも前述の不安感同様、実際にお茶会をしてみれば、茶道や着物などへの苦手意識が払拭され、学習意欲がわくことが予想される。

3. 調査結果

3.1 交流回数と不安感の関係について

共修前の紙面調査で、異文化を持つ人との交流の有無を、「一度もない」「一度交流したことがある」「2～3回交流したことがある」「何度も交流したことがある」の4項目でたずね、さらに交流に対する不安の有無をたずねた。以下の図1と図2がその結果である。

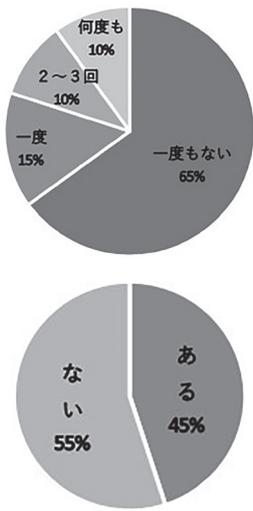


図1 児童との交流回数と交流への不安の有無

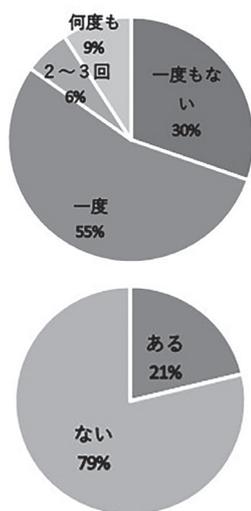


図2 留学生との交流回数と交流への不安の有無

以上より、交流経験がなければ不安を抱きやすい傾向がみられることがわかる。また、「2～3回交流したことがある」「何度も交流したことがある」と答えた小学生の全て（5名）が、交流に対する不安はないと答え、「不安がある」と答えた留学生の全て（9名）が、初めて交流する留学生であったことから、交流回数を多く重ねることが不安感の払拭につながる可以说。

4.2 異文化を持つ人に対するイメージの変化

共修前と共修後の紙面調査で、異文化を持つ人のイメージを5段階のSD法で14項目たずねた。例えば、明るさを問う項目では、「暗い」「少し暗い」「どちらでもない」「少し明るい」「明るい」と5つを挙げ、当てはまるものに印をつけてもらった。欠席等で共修前後の紙面調査の数が異なること、また、無回答である個所があることから、「暗い」を-2、「少し暗い」を-1、「どちらでもない」を0、「少し明るい」を1、「明るい」を2とし、回答者の人数で割った。つまり、その数値がマイナスであれば「暗い」を、プラスであれば「明るい」へ傾いていることがわかる。

以下の図3、図4は、茶道共修前後の数値をまとめたものであり、図5、図6は、日本の伝統的な遊びの共修前後の数値をまとめたものである。

図5は、紙面調査用紙の回収枚数が極端に少ない為、参考にとどまるが、中でも図4の変化がかなり激しいことがわかる。図5、図7より、留学生は日本人児童と接することが初めてであったとしても、日本で生活していることから日本人と接する機会が多く、共修によりイメージ

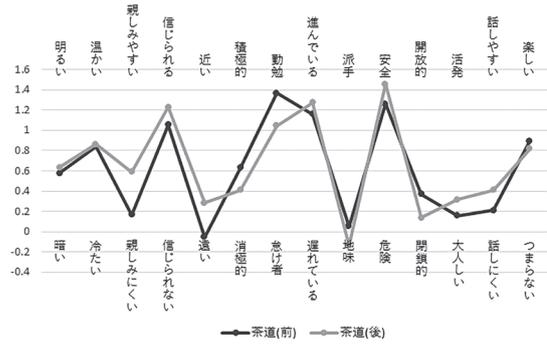


図3 留学生が持つ日本人児童のイメージ(茶道共修前後)

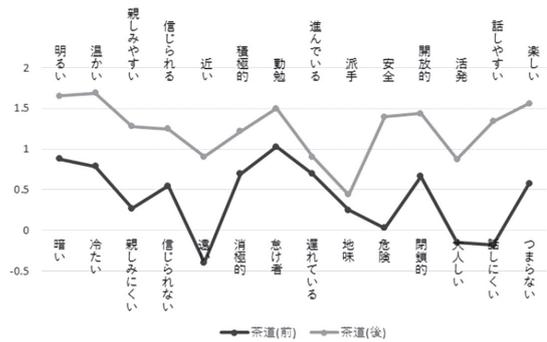


図4 日本人児童が持つ留学生のイメージ(茶道共修前後)

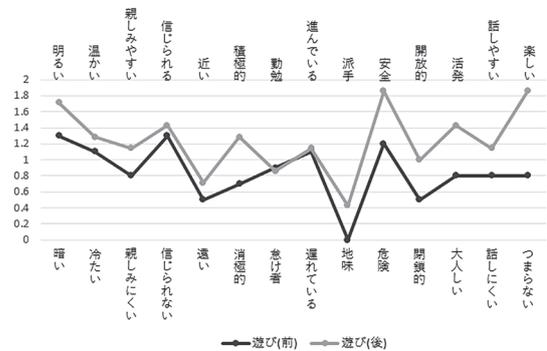


図5 留学生が持つ日本人児童のイメージ(伝統的な日本の遊び共修前後)

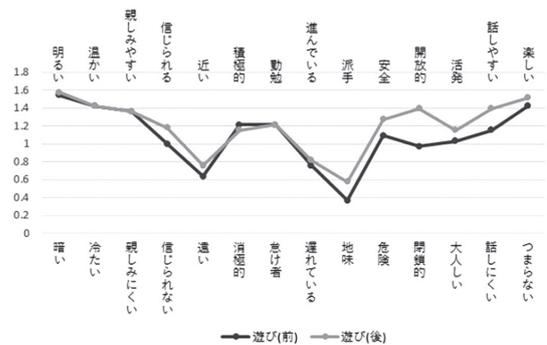


図6 日本人児童が持つ日本人児童のイメージ(伝統的な日本の遊び共修前後)

が大きく変化することはなかったと思われる。

図3～6により、初めての体験では、イメージが大きく変化することが分かった。

4.3 伝統文化に対する苦手意識と学習意欲

共修前の紙面調査で、茶道経験の有無を「ない」「何回かある」「よくする」の3項目でたずね、着物着用経験の有無を「ない」「何回かある」「よく着る」の3項目で尋たずねた。以下の図7と図8がその結果である。

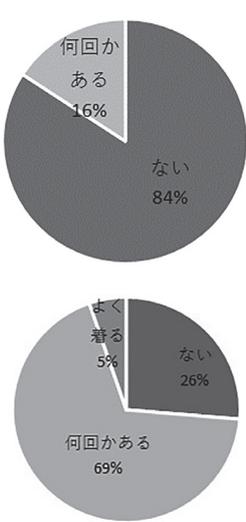


図7 留学生と茶道経験と着物着用経験の有無

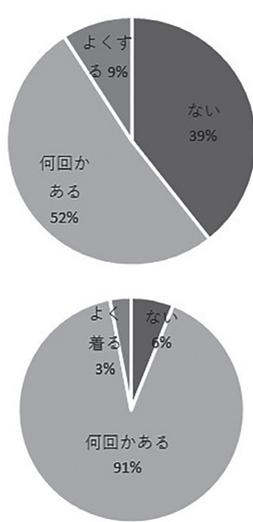


図8 児童の茶道経験と着物着用頻経験の有無

図7と図8より、やはり留学生より児童の方が茶道や着物を着る機会が多いこと、また、茶道より着物を着る機会の方が多ことが分かった。

共修前と共修後の紙面調査で、茶道と着物に対するイメージを5段階のSD法で8項目たずねた。図9,10は、茶道共修前後の数値をまとめたものである。

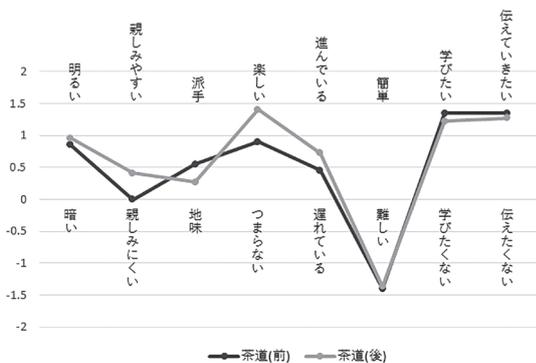


図9 留学生のお茶・着物に対するイメージ

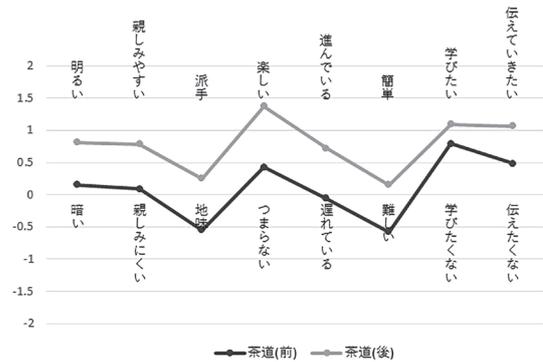


図10 日本人児童のお茶・着物に対するイメージ

日本語や日本文化を学ぶ留学生は、着物や茶道を体験する機会が多く、共修の日が初めての体験というわけではない。そのため、図9の共修前後に留学生が持つイメージに大きな差は見られなかったのであろう。留学生には共修当日までに自分で着物を着ることができるようにし、お辞儀や歩き方、お茶の点て方などを指導したのだが、その体験は、かなり難しかったようではあるが、伝えていきたい、学びたいという気持ちは依然として高いままであった。

図4に同じく、図10でも児童の着物・茶道に対するイメージが大きく良い方向へ変化している。

図4,図10から、留学生との交流すること、また伝統文化である茶道や着物への児童の不安を払拭させることができた上、留学生とのより深い交流が行えたと言えるであろう。

図11～14は、図9,10を茶道経験と着物着用経験の頻度別にみたものである。

図11より、茶道経験のある留学生の方が、茶道・着物に良いイメージを持っていることがわかった。

図12の「楽しさ」「発展度」「難易度」「学習意欲」の4項目において、着物着用経験のある留学生ほど、茶道・着物に対するイメージが悪くなっていることがわかる。これは、学習の大変さを分かっているからか、学習することに新鮮さがなくなっているからであろうか。

図13から、良く茶道をする児童の茶道・着物に対するイメージが非常に良いことが分かった。茶道経験の全くない児童と、何回か経験をしている児童とを比べると、「親しみやすさ」「楽しさ」「難易度」「伝えていきたいか」の4項目において、何回か茶道経験のある児童の方が茶道・着物に対するイメージが若干悪いことが分かった。図10より、茶道の共修後のお茶・着物に対するイメージが非常に良くなっていることを見ると、今回

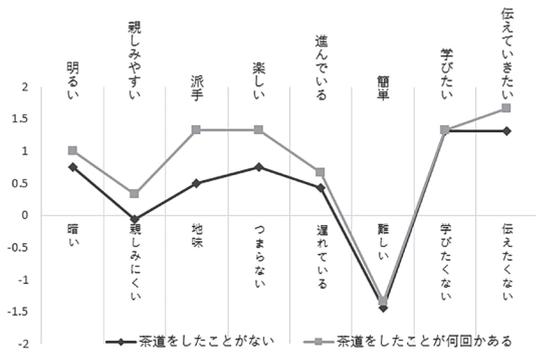


図 11 留学生の着物・お茶に対するイメージ(茶道経験別)

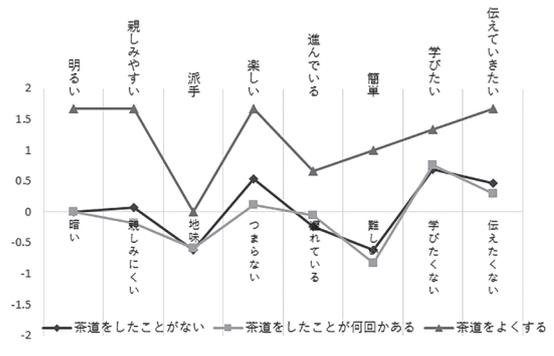


図 13 児童の着物・お茶に対するイメージ(茶道経験別)

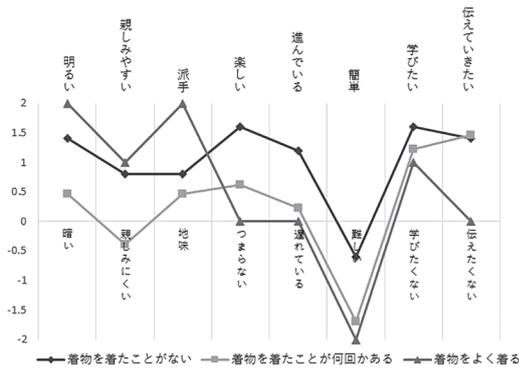


図 12 留学生の着物・お茶に対するイメージ(着物着用経験別)

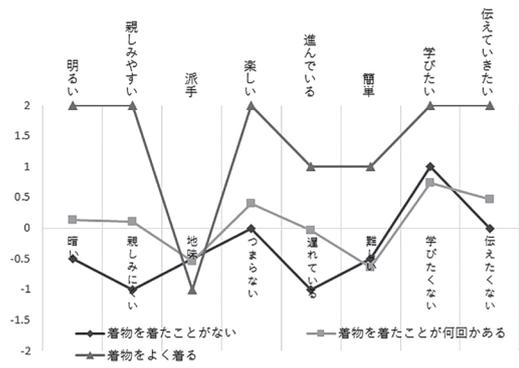


図 14 児童の着物・お茶に対するイメージ(着物着用経験別)

の留学生との共修の学習効果は非常に大きなものであったといえよう。

図 14 の「明るさ」「親しみやすさ」「楽しさ」「発展度」「伝えていきたいか」の 5 項目において、着物着用経験のある留学生ほど、茶道・着物に対するイメージが良くなっていることがわかる。図 13 では、何回か茶道経験がある児童の方がイメージが若干悪かったことと合わせて考えると、これまでの着物着用では良い体験ができており、これまでの茶道体験では、何かしら良くない体験をしてきた可能性がみられる。今回の共修が有効であったといえよう。

5. おわりに

児童と留学生という年代の違いを超えた共修により、「自文化理解」「異文化理解」を実現させるだけでなく、異文化を持った人に対する不安感を払拭し、さらに日本文化に対する印象も良い方向に導くことができた。やはり、伝統文化を概念だけで学ぶのではなく、実施に体験することによって身についたことが大きいと思われる。これからも共修の際には実技を取り入れて体験を通して学んでもらいたいと考える。

日本人学生との共修・交流では、受け身となりがちな

留学生が、児童を安心させようと、積極的に話しかける様子がみられた。茶道等の体験共修は、児童と留学生という年代の違いを超えても有効であるということが明らかにできたと思う。

しかし、この共修に向けての学習者への指導などには、非常に多くの準備が必要である。折角の機会を最大限に有効活用できるよう、また、前述の要素Ⅰ～Ⅲを達成し、社会で活躍できるグローバル人材の育成に貢献できるよう、体験を通した留学生と日本人との共修について、これからも検討していきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、和歌山市立藤戸台小学校教諭の半田竜矢先生と 6 年 2 組の子どもたちにアンケート調査に協力していただいた。この場を借りて感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 庵功雄著『やさしい日本語：多文化共生社会へ』岩波書店,2016
- 2) 細川英雄著『日本語教育学研究 3 「ことばの市民」になる——言語文化教育の思想と実践』ココ出版,2012
- 3) 細川英雄著『日本語教育は何を目指すか—言語文化活動の理論と実践—』明石書店,2004

- 4) 細川英雄著『日本語教師のための実践「日本事情」入門』大修館書店,1994
- 5) 中島智子編著『多文化教育：多様性のための教育学』明石書店,1998
- 6) 徳井厚子著『多文化共生のコミュニケーション：日本語教育の現場から』アルク,2002
- 7) 池田玲子, 館岡洋子著『ピア・ラーニング入門：創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房,2007
- 8) 細川英雄著「「ことばの市民」になる教育へ：自己・他者そして社会の外国語学習」総合政策研究 52 号 p.87～p.89,2016
- 9) 金城尚美著「小学生と留学生の交流活動による異文化理解教育の教育効果に関する一考察」琉球大学留学生センター紀要 留学生教育 第 7 号,2010
- 10) 外山理沙子他著「負のピア効果—クラスメイトの学力が高くなると生徒の学力は下がるのか?—」RIETI Discussion Paper Series 17-J-024,2016
- 11) 長友文子著「地域の学びを通しての「日本事情」の試み」和歌山大学国際教育研究センター年報,第 10 号,pp.71-83,2013
- 12) 宮本美能著「留学生と日本人学生の国際共修授業における一考察：言語の問題へのアプローチと学習効果」
- 13) 大阪大学大学院人間科学研究科紀要,41 巻,pp.173- 191, 2015
- 14) 松岡靖他著「小学校の異文化理解に関わる認知的発達」広島大学 学部・附属学校協働研究機構研究紀要,第 39 号,pp.93- 98,2010
- 15) 村田明著「武道・伝統文化：特色ある日本事情授業での留学生の声」信州大学総合人間科学研究,第 11 号 ,pp.258-268,2017
- 16) 島崎馨著「地域住民との国際共修—留学生のアイデンティティの変化に着目して—」東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要,3 巻,pp.227-237,2017
- 17) 東悦子著「留学生による国際交流活動の意義—留学生ボランティアのコーディネートを通して—」和歌山大学国際教育研究センター年報,第 2 号,pp.64～72,2005
- 18) 東悦子他著「小学校・中学校における国際理解教育と留学生の国際交流活動—粉河小学校・津木中学校での活動事例を通して—」和歌山大学国際教育研究センター年報,第 3 号,pp.66-75,2006
- 19) 東悦子 尾久土正己著「留学生と地域の人々—国際交流と国際理解」和歌山大学国際教育研究センター年報,第 5 号,pp.57-66,2008
- 20) 坪沼妙子著「教育の経済学的分析：公共経済学の視点から」東京女子大学紀要論集,50 巻,2 号,pp.249- 273, 2000
- 21) 細川英雄著「公共日本語教育という思想へ：早稲田日研のこれまでとこれから（日研設立 15 周年特集 新たな日本語教育学の構築をめざして：日研の挑戦）」
- 22) 早稲田日本語教育学, 20 巻,pp.21- 31, 2016
高橋亜紀子著「日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義：『異文化間教育論』受講者のコメント分析から」宮城教育大学紀要, 40 巻,pp.15- 25, 2005
- 23) 佐藤勢紀子他著「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」東北大学高等教育開発推進センター紀要, 6 巻,pp.143- 156, 2011
- 24) 和泉元千春, 岩坂泰子著「教員養成大学におけるグローバル化に連動した国内学生と留学生の共修による言語文化教育」次世代教員養成センター研究紀要,2 巻,pp.47-57, 2016
- 25) 高橋 亜紀子著「日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義：『異文化間教育論』受講者のコメント分析から」宮城教育大学紀要, 40 巻,pp.15-25, 2005
- 26) 岡田彩, 中村伊都子著「日本人学生と外国人留学生による「学び合い」の促進：同志社大学政策学部と京都アメリカ大学コンソーシアム (KCJS) の協働から」同志社大学学習支援・教育開発センター年報,7 巻,pp.89- 102, 2016
- 27) 磐崎弘貞他著「「留学生を活用した異文化交流型コミュニケーション活動プロジェクト」報告書」外国語教育論集, 38 巻,pp.87- 95, 2016
- 28) 浮葉正親, 田中京子著「異文化交流実践を授業へフィードバック」名古屋大学留学生センター紀要,第 11 号, p.104-108, 2013